

1 論説文(説明文)の読解

1・1 論説文(説明文)とは

論説文とは、筆者が主張を伝えることを目的とした文章である。筆者の言いたいことを理解することが求められ、文章自体も主張を伝えることを目的としている。そのため、読者はすべてを漠然と読むのではなく、筆者が注目してほしい部分を選んで読むことが必要である。そこで大切なのが、筆者は大事な内容が大事であると思われるように書いているという前提だ。つまり、筆者がここは大事であるとわかるような表現を使っている部分を注意して読むというのが論説文の読解における正しい姿勢である。

1・2 読解の手順

問題を解く手順としては以下のものを勧める。必ずしもこれに従う必要はない。

- 1 問題の文章をすべて読む。このときに、表現から大事であるとわかる部分に線を引いて印をつける。
- 2 設問の文を読んで問題の種類を把握し、解答の骨組みを作る。
- 3 骨組みを作った結果、解答に必要な内容になる内容を本文中の線を引いたところを中心に探す。
- 4 本文から探してきた内容を骨組みに加えることで、解答を完成させる。

この手順で想定しているのは記述解答のみである。選択解答の場合は記述解答をするように解答を作成したあとで、最も近いものを選ぶようにする。そのほかの問題でも、ここに示した手順をマスターすれば問題ないだろう。

2 筆者の主張の発見

読解の第一段階として筆者の主張を文章中から発見して印をつける。そのときに筆者の主張を発見する方法を述べる。

2・1 表現でわかる重要さ

筆者は読者に対して効果的に主張を伝えるために、その部分が大事であると思われるような表現を使う。代表的なものを挙げると次のようになる。

否定 Aではなく、Bである。

定義 Aとは、Bである。

添加 Aであることに加えて、Bである。

強調語句 「こそ」、「まさに」、「重要な」、「大事な」などのわかりやすい語句による強調。

これらの表現がすべてというわけではない。しかし、これらは文字を見るだけで確実にわかる簡単なものばかりだ。このような表現を見つけたらその部分に印をつけるといいです。印のつけ方はあとでまとめて示します。他にも表現によって重要性を伝える方法があるが、最初はわかりやすいところから覚えよう。

2・2 例を利用した主張

例が文章中に現れたら読み飛ばすということを指導する人をたまに見かける。実際に具体例は文章中において優先度が低い事柄であることは間違いない。しかし、例を挙げるというのはある意味では遠回りであり、またその半面で主張をわかりやすく伝えることにつながる。わかりやすく伝える手段を用いるということは、例が説明する内容はそのまま筆者の伝えたいことであるということである。

これらをまとめると、文章中の例(具体例)はそれ自体はそこまで必要ないが例が説明する内容は大事である。という少し逆説的な結論を得る。こうなると具体例もしっかり読まなければならないのかという話になるが、そうではない。そこで次の文を見てほしい。

スマートフォンの普及が人とインターネットとの距離を縮めている。何かわからないことがあれば「ググる」し、暇になればYouTubeで動画鑑賞をする。SNSはインターネットを利用した最たる例であり、皆はそれを通して他者とのつながりを持ったりもしている。インターネットに接続できる端末を持ち歩くようになったことで、日常生活にインターネットのもたらす恩恵がふれるようになったのだ。

この例文では、二文目、三分目が具体例になっている。そして一文目、四文目はともに具体例が何を主張したいのかを示している。どちらも「スマホでインターネットが身近になった」と主張していて、具体例が身近になったインターネットの例を示しているのだ。

この例文から理解してほしいのは、具体例の前後には例が何の主張の手助けをするものなのかが示してあるということである。そして、それは筆者の主張に間違いない。そこで問題を解く上では、具体例を発見したらその前後から筆者の主張を発見することが必要になる。大抵は前後の両方に筆者の主張が示してあるが、どちらか一方が欠けている場合がある。

¹ 優先度が低いというのはあくまで問題を解く上での話です。

2・3 一般論の否定

強力に主張を展開したい場合は、初めに一般的な考えを紹介したうえでそれを否定するように自らの主張を展開する手法がある。次の例文を読んでみよう。

無死一塁では送りバントするのが定石といわれている。しかし、実際は送りバントによって得点できる確率が大幅に上がらない。・・・

皆が考えることをいちいち文章にはしない。基本的には筆者の主張は一般論とは違う部分がある。そのため例文のような表現が散見される。「しかし」という語句から、強調されていると読み取れるがそれ以上に一般論の否定であるので強調の度合いは大きいことがわかる。